

まちの「見えていなかったこと」を、 1枚の地図にする

データに基づく意思決定のための、地域空間データ基盤

まちの情報は、役所や国のデータにバラバラに眠っています。それを一つの地図に重ね、「どこに、何が、どれだけあるか」をひと目で分かるようにします。勘や印象ではなく、数字で、まちの現在地を見る道具です。

何が見えるようになるか

① どこに人が住み、減っていくか

町丁目ごとの人口・世帯・高齢化率。国勢調査に基づく実測値。

② どの建物が古いか

建物を一棟ずつ、建てられた年で色分け。1981年（新耐震基準）より前の建物がどこに集まっているかが分かる。

③ どこが水に浸かり、崩れるか

洪水浸水想定（規模別）と土砂災害警戒区域。国・県が定めた公式の想定。

④ 人が実際にどう動いているか

昼と夜で、どこに人がいるか。携帯電話の統計に基づく推計。

ほかと何が違うのか

国や自治体の地図の多くは「1種類ずつしか見られない・重ねられない」ものです。このシステムは、複数の情報を同じ土台で重ね、掛け合わせて考えられます（下図）。データを差し替えれば自動で最新化し、他の市町へも展開できます。

数字を「溶かさない」という約束

実際に数えた事実、公式の想定、統計からの推計。この3つは性質がまったく違います。一つの点数に混ぜると、根拠が説明できなくなります。3つを色と模様で区別して見せ、決して混ぜません。決めるのは人。私たちは判断の前に、材料を正直に並べます。

実測・全数

人口・建物・標高
(ベタ塗り)

公式の想定

浸水・土砂災害
(斜線・規模を明記)

推計

人の動き
(薄い色)

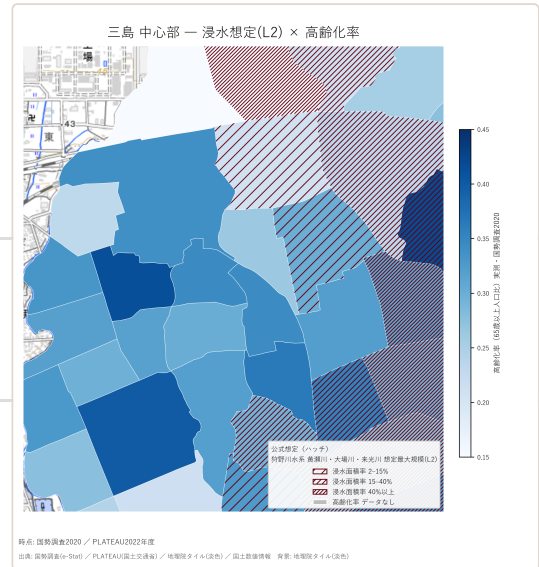
使える場面

- 自治体：防災（避難計画・水害対策）、老朽インフラの優先順位、空き家・まちづくり、公共施設の再配置
- 建築・不動産：敷地の外側の根拠づくり。「なぜこの土地か」「20年後に人がいるか」に数字で答える
- 企業：出店・撤退・拠点配置。自社のデータを重ねれば、さらに深い分析へ

使用データ（すべて公的なオープンデータ）：国勢調査（総務省統計局）／3D都市モデル PLATEAU（国土交通省）／数値標高モデル・地理院タイル（国土地理院）／指定文化財・災害情報（国土数値情報, 国土交通省）／人流オープンデータ（国土交通省）。各自治体が非公開で管理するデータは使用していません。市のデータをご提供いただければ、同じ地図の上でさらに詳細な分析が可能です。

五十嵐こと AIプロダクトアーキテクト／Z-AI株式会社（静岡県長泉町） | 公益財団法人静岡県産業振興財団 登録専門家
経歴：SAP・SAS Institute でデータ製品開発 | データに基づく意思決定戦略・地図／位置情報データ活用 | anozenjo.org

実例：三島市中心部 浸水想定（想定最大規模）× 高齢化率



大堀川に近い低地（斜線＝浸水想定）に、高齢化の進む街区が重なる。「守るべき場所」が数字で浮かぶ。